平成28年9月号　№479

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町198-3
電話（043）485-1801

思い出の谷中---------- 藤原　敏雄
勇気をもって生きよう------ 志津　憲司
カレッジ２年生に向けて-- 淺野　倉子
やっと佐倉市民？---------- 上坂　志郎

良寛　ゆかりの地を訪ねて

岡本　治之

良寛ゆかりの地といえば、まず生誕の地、新潟県の出雲崎である。はじめに桜や水芭蕉が咲く良寛記念館を訪ねた。ここの庭は出雲崎百景第一の地とされ、丘の上からは眼下に良寛堂と細長い街道筋の町並が見える。はるか右手には弥彦山、さらに国上山（くがみやま）が見え、正面には佐渡島が横たわっている。芭蕉が出雲崎で歌ったという「荒海や佐渡に横たう天の川」の句碑のある小さな庭園芭蕉庵は良寛堂のすぐ近くにある。

記念館から急坂を下ると良寛堂に出る。ここは橘屋の屋敷跡である。堂の海側にある良寛坐像は、洋上に浮かぶ母の故郷佐渡をじっと見つめている。良寛はこの町と近隣の農村を支配する名門名主橘屋（山本家）に生まれたのである。名主見習の役に就いていた良寛は18歳で出家した。やがて大忍国仙和尚に従い、岡山玉島の円通寺で、22歳から11年間厳しい修行に励んだ。

玉島からの帰国後は、暫く転々としていた。良寛が40歳からほぼ20年住んだ五合庵は、燕市にある。広々とした田園地帯のなかで優しい姿をした国上山の中腹である。山頂に近い名刹国上寺（こくじょうじ）から急な山道を10分ほど下ったところにある。簡素な茅葺き屋根の草庵は、杉に囲まれ自然に溶け込んでいるが、冬の長い雪国ではさぞ厳しい寒さであったろう。この庵で良寛を支える友人や江戸からの客人との交流を楽しみ、文芸・思想が開花していったのである。

五合庵への急な坂がきつくなってきた60歳の良寛は国上山山麓の乙子神社の草庵に移った。ここでも良寛は無一物の清貧を貫き、托鉢をして食を乞う生活であった。道々子どもたちと手毬などをして遊び、歌友だちと唱和し、書を楽しむ良寛でもあった。

69歳で長岡市島崎の能登屋木村邸内に移り、心をこめた世話を受ける。今でも木村家は黒板塀に囲まれた風格のある屋敷である。ここで手毬つきを菩薩行と見抜いた貞心尼との出会いがあり、歌集『はちすの露』（貞心尼）に残る良寛と貞心尼の唱和の歌によって晩年の姿を知ることができる。良寛は貞心尼らに見守られて74歳の生涯を終え、木村家の近く、隆泉寺に眠る。

唐木順三は「良寛にはどこか日本人の原型のやうなところ、最後はあそこだといふやうなところがある」という。

「形見とて　何か残さん春は花　山ほととぎす　秋はもみじ葉」自然の中に生き、師を慕いつづけた良寛辞世の歌といわれている。

（編集委員）

思い出の谷中

私の育った谷中は、上野の森と繋がっていて、昭和20年の東京大空襲の際、上空から見ると山に見えるらしく空襲には遭わずに済んだと母から話を聞きました。谷中と言えば、今人気の「谷中ぎんざ」と「夕焼けだんだん」があります。

階段から「谷中ぎんざ」方向を見た時、富士山と夕焼け空を赤く染めながら沈む夕日を見た記憶があります。そんな風景もマンションやビル等で、今は見ることが出来ず残念に思っています。ちなみに「谷中ぎんざ」周辺は昭和40年頃までは谷中初音町と言い、由来は年初に鳥の初鳴きの声が聞こえるからだそうです。

そんな谷中で、一番の思い出は昭和32年の7月、幸田露伴のモデルになった谷中五重塔の焼失放火心中です。早朝、母から五重塔が燃えていると起こされ、外を見ると真赤に燃えさかる炎に、上部の宝珠と九輪が見え隠れしながら左右に揺れ、今にも倒れそうでした。百数十㍍しか離れていない我が家の方に倒れたら焼失するので、母が小学4年の私と姉に教科書を風呂敷に包みなさいと言い、ドキドキした事を覚えています。幸い塔の上部はそのまま残り後日解体されました。その跡地の端に駐在所が設けられ、室内には五重塔焼失の写真が額に飾られています。その真向いには長谷川一夫の分骨された小さなお墓があります。

その他、谷中霊園には徳川家をはじめ、著名人のお墓が多くあり、鳩山一郎と横山大観のお墓は並んで建っています。

桜の季節には、五重塔跡地の前の道路は桜のトンネルが出来、谷中らしさを感じられる事だと思います。

（ユーカリが丘　藤原　敏雄）

カレッジ2年生に向けて

昨年はとにかく、自分の挑戦した世界に、ただ新鮮と驚きと楽しさで忙しい日々だった様に思います。その生活の中で私なりに感じた事です。

ある時、一度切りの人生なのにもっと大切に悔いのない様にと日頃の生活を反省と共に　思考した時、不思議と向上心がむくむくと湧く思いにかられたのです。そして計画を立案し実行に向けての努力をすると、生活に張りが出て忙しくもあり心が充実して頑張れるのは生きる勇気でしょうか。仲間とのお喋りにも心が動いたり、我が振り直せの如く反省材料としたり、相手の言葉は丁寧に聞き、自分の思いを伝える時は、きちんと伝える努力の大切さを知りました。日頃、私は新しい品物をあまり購入しません。古い台所用品、洋服など少々不便であり時代遅れでも何故か愛しく使用したり着用して楽しんでおります。カレッジ生になっていなければ着ることも無かったであろう洋服も私の思い出と共に通学しています。それは日頃から、ささやかな心掛けで小さな幸せを呼ぶ事を知ったからです。先日は小さな庭に、こぼれ紫蘇が繁り、その葉でドレッシングを漬け込みました。仕上る頃に友人とサラダで楽しみたいと待っています。今年は「まちづくり」にも参加します。私達は未来のある子供達の成長する姿に触れ、少しでも手助け出来ないかと皆さんと奮闘中です。

皆さん、是非心躍る事を見つけて一緒に頑張りませんか。悩み事が少しでもありましたら、友人や回りの方に聞いてもらったりすると意外と解決しますよ。

この一年も健康に気をつけ無事乗り切りたいと願っている昨今です。

（藤治台　淺野　倉子）

勇気をもって生きよう

早いもので佐倉市民カレッジ３年の夏休みを迎えました。２年終了後、３ヶ月間の長い春休みがありましたが、この間に色々経験をすることができました。

クラスの仲間たちと観梅や花見を楽しみ、竹の子掘りや潮干狩りにも出かけ、バスを仕立てて温泉一泊の修学旅行にも行き、あっという間の３ヶ月でした。また、「まちづくり活動」も月に一度の定例で活動しました。なんと充実した市民カレッジライフでしょう。

通学時に電車の窓から見る景色は、華やかだったチューリップが終わり、今は青々とした稲など緑一色に変わっています。

そんな折り、人生初の体験をしたのです（読者の皆さんもいつかきっと！）。京成津田沼駅から電車に乗った時のことです。若い女性に席を譲られました。遠慮して「そんなに見えますか」と言うと「つぎ降りますから」と席を立って行ってしまいました。一瞬迷いましたが、気持ちを有難くいただくことにしました。電車の中でよく見る光景です。譲られても座らないお年寄りがいます。席は空いたまま、次の駅で事情を知らない乗客が難なく座ります。優先席でよくあるトラブル？とか、５人席に４人で座る等々。

譲る勇気も素晴らしいのですが、譲られたら素直に座る勇気も私たち世代にも必要なことではないでしょうか。

２０２０年の東京オリンピック・パラリンピック、おもてなし日本。外国の人々に日本の素晴らしさを肌で感じてもらう良い機会にしたいものですネ。

（上志津　志津　憲司）

やっと佐倉市民？

小生　西志津に居住して早や20年になる。我が家は佐倉市の最果て西志津地区にある。

引っ越して来た当時、眼前に広がるのは八千代市の終末処理場と雑木林であった。

昨今では我が家から見える風景も一変して終末処理場は取り壊され跡地には整然と一戸建てが立ち並んでいる。

南西１㌔も行けば千葉市花見川区、道路一筋向いは八千代市で防災無線放送が聞こえるのは八千代市の広報連絡放送である。

日常の買物や外食も八千代市方面に出掛けることが多い。現役時代の通勤や休日に出掛ける際、勝田台が近く、利用する交通機関は京成勝田台駅や東葉高速勝田台駅、その際利用の自転車の駐輪場は八千代市営である。

一時預けは同一料金だが月契約や年契約となると市外者は２倍近い料金を支払っていた。

数年前胃の具合が悪く八千代市内の掛り付けの医院で受診した時の事、先生から「八千代市民だと検査の補助が市から出るんですよ」と言われ残念な思いもした。

こんな風で現役時代の数年は市境の住居の為か佐倉市の恩恵を受ける事が少ない日々を過ごしていた様に思う。

退職後に佐倉市民カレッジに入って佐倉市の東南方面にも出掛ける事が多くなり、ほとんど利用することがなかった志津駅も、下り方面に行く時は今や勝田台駅よりも多く利用している。

佐倉市の色々な施設を利用する事も極めて少なかったが今日では多くの施設や行事にも参加し学び楽しんでいる此の頃である。

（西志津　上坂　志郎）

９月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先
佐倉市立中央公民館　TEL: 043-485-1801　FAX: 043-485-1803
〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3
E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp
URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

誰もが知っている昔懐かしい、歌い継いで来た抒情歌。さて、皆さん二番目、三番目の歌詞もご存じですか？

通勤電車の中で声を出さず、繰り返し歌って昔を偲んでみましょう。

月の砂漠　●里の秋
●まちぼうけ●通りゃんせ
●七つの子　●故郷
●かあさんの歌●赤とんぼ
●ちいさい秋みつけた●あの子はだあれ●夕焼小焼●村の鍛冶屋…。

因みに、某新聞社の調査での人気No.1は「赤とんぼ」で、次いで「ちいさい秋みつけた」だそうです。

「あっ！　下車駅ですよ～乗り越しに注意」。

さあ、今夜は真面目に直帰し、お子さんやお孫さんとお風呂に入って、是非、聞かせてあげましょう。

（田中　修司）

あとがき

我が家の裏にホタルの群生地がある。数年前酔っぱらっての帰路、目の前にチカチカ光る物を見「俺、今日飲み過ぎたのかな」よくよく見るとホタルの乱舞である。帰宅後寝ている妻を起こして、「そこにホタルが沢山飛んでいたよ」と話したところ、「酔っ払いがなに言ってるの寝なさいよ」と怒られる始末。

翌日の夕食後、妻と二人で見に行く。「凄い、こんな近くにホタルがいるなんて五十何年知らなかった」と妻。会社人間時代は地域の事など関心を持たず、地域人間になって初めて自然豊かな佐倉を再認識した次第です。近くの里山には天然記念物の山鼠、春には大鷹が子育てしたりと新しい発見の日々を過ごす今日この頃です。

（内田　節）